

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 48 2018. 3

栃内吉彦先生小伝（第4回、最終回）	栃内 香次	-----	1
ハエの話	諏訪 正明	-----	5
セントラルパークに誘（いざな）われて	加藤 康子	-----	9
ナガカメムシというへんなカメムシについて	伴 光哲	-----	10
お話の出来る犬～古新聞の整理から～	久末 進一	-----	11
北海道大学附属図書館旧蔵図書に見る札幌農学校学生の学習実態	山田 大隆	-----	12

## 特別寄稿

### 栃内吉彦先生小伝\*（第4回、最終回）

北海道大学名誉教授 栃内 香次

#### 9 文筆家としての父

父は若い頃からさまざまな機会に広範な話題について文章を書いており、北大予科に入学して間もなくの頃から最晩年、80歳近くまで学内の出版物から新聞、雑誌、業界誌など、いろいろなところに文章を寄せている。この他に研究者として専門分野の論文、著書の他にも植物の病虫害に関する解説、あるいは啓蒙的な著述が多数あり、文章を書くこと自体が心から好きだったようである。もちろん、これらのすべてに眼を通すことは不可能で、私が読んだものはその一端にすぎないが、いずれの文章でも植物学者の立場で物事を観察し、その結果をもとにきちんと整理して書いているという印象が強い。当然、題材も植物に関するものが圧倒的に多い。

このように、父の著作は極めて広範な出版物に掲載されており、単行本として出版されたものは少ないが、随筆集をいくつか出版している。現在入手可能なものはないが、書名と概略を以下に挙げておく。

- 『山談花語』1943（昭和18）年5月 東京、青山出版社 232ページ  
1927（昭和2）年から1942（昭和17）年にかけて雑誌等に発表された39篇を収めている。戦時中の出版で紙質、装釘とも貧弱である。
- 『若菜頌』（日本叢書19）1945（昭和20）年10月 東京、生活社 31ページ  
日本叢書は戦争末期の1945（昭和20）年4月から刊行され、さまざまな分野にわたっている。第1巻は中谷宇吉郎博士の「霜柱と凍土」という著書である。当時のこととしてB5判のざら紙に印刷し、2つ折にしてホチキスで止めて1冊にするという極めて粗末な作りである。この『若菜頌』は書き下ろしで、例によって野草を食べる話を中心に、古歌から俳句、さらには藤村の詩まで引用して様々な春の野草について書いている。
- 『春秋夏冬』1947（昭和22）年6月 札幌、柏葉書院 159ページ  
柏葉書院は戦後間もなく設立された(らしい)

\* タイトル「栃内吉彦先生小伝」は、編集委員会による

出版社で、北大関係者を中心に随筆集から科学関係の一般向け解説書まで種々の本を刊行していた。本書はその1冊であるが、出版のいきさつは不明である。本書も書き下ろしで、四季それぞれを題材にした4篇からなる。

この他、『随筆北海道』、『あなたの博物誌』など複数の著者の著作をまとめた随筆集に掲載されたものがある。変わったところでは1947（昭和22）年に刊行された『詩文集 層雲峡の四季』という層雲峡温泉の観光振興のような書物に、「釣り」のところで触れた『層雲峡の岩魚』を載せている。

これら以外に、折に触れさまざまな新聞、雑誌に寄稿したものがかなり多数ある。中でも北海道新聞の「魚眼図」に11年間書き続けた小篇は晩年の代表作と言えるので、以下に記載する。

・北海道新聞「魚眼図」の小篇 1958（昭和33）年5月11日～1968（昭和43）年9月4日 全204篇  
魚眼図は現在まで60年近く続いている極めて長寿のコラムである。父はこのコラムが始まった頃から寄稿していた。1964年ころまでは月3～4篇書いていたが、その後次第に減って月2篇程度になり、1967年後半は月1篇、最後になった1968年には1月から9月にかけて5篇を書いている。各篇は400字詰め原稿用紙1枚程度の小篇であり、かなり念入りに推敲していたようで、短いなりに苦労があったと思われる。その意味で、晩年最も打ち込んだ著述だったと言ってもよいであろう。

なお、このうちの一部は次の単行本として出版されている

・『山樹野花』（ぷやら新書12）1962（昭和37）年7月 札幌、ぷやら新書刊行会 63ページ

「魚眼図」に掲載された小篇中、1958年から1961年にわたる78篇を収めている。この本はいわゆる「豆本」に属し、1960年から1973年にかけて50冊刊行された。編者は和田義雄氏である。

余談であるが、和田さんとはこれを縁にお付き合いがあったようで、和田さんが1973（昭和48）年に出版された『札幌喫茶界昭和史』という本をいただいている。この本に書かれている歴史は父が札幌で暮らした時代とほぼ重なっており、本小伝を執筆する際にいろいろと参考になった。例えば同書の冒頭に、1920（大正9）年に開店したカ

フェ・パウリスターのことが載っており、社長が松村松年先生、筆頭株主が佐藤昌介先生であったことが紹介されている。

これらの随筆集のうちの2冊が表題に「山」と「花」を含んでいて、やはりこの2つが父の興味の中心であったことを物語っている。

#### ・随筆目録

1980（昭和55）年のいつ頃だったか、農学部農業生物学科を1929（昭和4）年に卒業された卒業生で、父とは古くから親しかった岩垂 悟さんが訪ねて来られた。岩垂さんは、戦前は北海道農事試験場を経て旧満州国の農事試験場に勤務され、戦後は1950（昭和25）年に設立された北興化学（農薬製造会社、のち北興化学工業と社名を改め現在に至る）に勤務されていた方である。同社は北海道に拠点工場を持つなど、北海道と縁が深く、北大農学部出身者も多い。そのようなつながりで父とは昔からお付き合いがあり、家にもしばしば来られていた。岩垂さんは同社を定年退職された後、ガリ版（孔版）印刷を趣味とされ、いろいろな印刷物を作っておられたが、その一環として父の随筆集を印刷し、関係者に配りたいということ伝えられた。

上記のように、父の著作は長い年月にわたって様々の出版物に掲載されている。しかも、新聞や雑誌に掲載されたものが多い。これらは新聞からの切り抜き、雑誌の別刷りあるいは掲載誌そのものなど、特別に整理されないまま家に保管してあった。父自身にはこれらを整理する気持ちがあったのかも知れないが、結局は果たさずに亡くなり、保管を引き継いだ私も現役の頃で時間の余裕がなく、丁度良い機会と思い、お願いした。

岩垂さんは、これらをすべて整理し、序文、約10篇の随筆、魚眼図の小篇数十篇を組み合わせ、さらに目録を作成して、A5判100ページほどの冊子としてガリ版印刷をしてくださった。表題は『枅内吉彦先生の随筆』で、制作されたのは1980（昭和55）年5月である。岩垂さんはこれを3年間続けられ、続篇、続続篇として3冊制作された。なお、最後に作られた続続篇は少し短かめで、目録も割愛されている。

この随筆目録は予科在学時代の 1913（大正 2）年から、1972（昭和 47）年に札幌同窓会報に寄稿した「六十年」というエッセイに至るほぼすべての著述を発行年次順に整理した労作である。

岩垂さんによるこれら一連のお仕事を通じて、埋もれていた父の著作をかなり多数見つけ出すことができ、本小伝の執筆に際し最大の参考資料となった。ここに泉下の岩垂さんに感謝の意を表したい。

## 10 父と家族

私は 1939（昭和 14）年生まれ、妹は 2 歳下である。我々には年の離れた兄 晃吉がいたが、1942（昭和 17）年 9 月に北大農学部農学実科を卒業して直ちに陸軍に入隊し、幹部候補生を経て 1944（昭和 19）年秋に陸軍少尉に任じられて沖縄に赴き、1945（昭和 20）年 5 月、那覇北方で戦死した。このことは父と母にとって痛恨の出来事であったに違いないが、自分たちの心の内に封じて我々には事実のみ淡々と触れただけであり、それ以上は語らなかつた。兄が出征したのは私も妹も物心つく以前のことであり、我々には兄についての記憶は全くない。

父は、いずれは沖縄を訪れ、兄の戦跡を尋ねたいとの思いがあったようで、それを詠んだ歌を残しているが、結局その思いはかなわなかつた。そのような次第で、父や母の意を体して、兄については触れないでおきたい。

家族というと一家そろった写真がつきものであるが、現在のように何かというと写真を撮るとい



写真 1 野幌にて、1952 年 9 月 23 日  
著者（左から 2 番目）は中学 1 年生



写真 2 父の古希祝いのおりの両親。  
北大クラーク会館にて、1963 年 12 月 11 日

時代ではなかつたこともあって、一家四人がそろった写真はほとんどない。野幌にキノコ狩りに行ったときに撮ったのは数少ない例である（写真 1）。これはそのとき同行された農学部の吉田富穂先生に撮っていただいたもので、私が中学生のときである。なお吉田先生も岩手県出身で、『巖鷲協会創立 90 周年記念誌』に載っている草創期の歴代会長小伝中の父の記事を執筆され、この写真はその記事にも載せられている。

父と母の写真もあまりない。ここに掲載したのは父の古希（1963 年）祝賀会の際の写真である（写真 2）。

なお、母 栃内茂子は旧姓を大枝といい、1902（明治 35）年 4 月 28 日生まれで、1989（平成元）年 10 月 3 日に 87 歳で死去した。父は盛岡藩、母は川越藩の家臣の家に生まれ、それぞれの祖父母の代にはともに幕臣として明治維新に際会して辛酸を味わった家柄であった。

## 11 おわりに

これまで随所で述べてきたように、父は文章を書くのが好きで、若い頃から晩年に至るまで多数の文章を書いているが、自伝的なものはいろいろな文章の中で断片的に触れたものが散見されるの



みで、まとまった形のものはない。これだけ沢山の文章を残しながら自分史のようなものを書かなかったことを見ると、父には書く意思がなかったのだと思われる。

このため、始めにお断りしたように、本小伝の多くの部分は我々兄妹の記憶に残る父の「思い出」を取り上げたものにならざるを得なかったのであるが、「小伝」ということを考え、基本的に出典は印刷出版されたものに限り、伝聞はなるべく用いないようにした。

9章でも述べたが、岩垂 悟さんが父の残した多数の文章を整理し、年代順、種類別に詳細な随筆目録を作成してくださった。この随筆目録は本小伝を執筆する際の最大の参照文献であり、これが無ければ執筆に多大の困難があったと思われる。

本小伝の執筆は、北海道大学総合博物館ボランティアの会「ボランティアニュース」編集委員会からの話がきっかけであった。同編集委員会からはいろいろとご助言、ご意見をいただくことができ、完成度を高めることができた。ここに感謝の意を表したい。また私にとっても、この仕事

を通じて長年放置していた父の書き残したものを整理し、日々に記憶が薄れつつある60年以上昔の古い出来事を思い出し、リフレッシュする機会を得たことが望外の収穫であった。

なお、最初に述べたように、本文の執筆は私であるが、妹宮本昌子には随時内容をチェックしてもらった。それにより私の思い違いや記憶に残っていなかった事柄が判明した箇所がいろいろあり、関係者に眼を通してもらうことの重要性に改めて気づかされた。これら妹からの寄与について感謝する。妹からは、この仕事を通じていままでとは異なる新たな父親像が付け加わってきたという感想が寄せられており、やはり一つの収穫が得られたのではないかと思う。

以上、父の小伝を書き綴ってきたが、両親が比較的高齢になって生まれた我々兄妹が直接見聞きしたのは父の後半生に限られている。また、専門が異なる父の研究については深く紹介することができず、最初にお断りしたように「伝」というよりは「思い出」の部分が多くなったことについてご寛恕を請う次第である。(完)



### 写真パネル展

## シマエナガさんの12ヶ月

前からみると、真っ白毛玉。  
道外のエナガとは、見かけがちがう  
北海道のシマエナガ。  
へんてこ可愛い小鳥の四季の姿が  
道東在住の三人の自然写真家さんより  
届きました。

北海道総合博物館 1階 企画展示室にて  
2018年3月30日(金)まで (月曜日は休館)  
入場無料です  
優しい、愛らしい姿に会って、ゆたかな気持ちの  
ひと時を過ごされてはいかがでしょうか・・・。  
シマエナガさんたちがお待ちしています。

## 特別寄稿

## ハエの話

北海道大学名誉教授 諏訪 正明

以前（2009年7月31日）ボランティア談話会でハエの話をして致しました。このたび、ボランティアニュース編集委員会よりその時の模様をボランティアニュースに掲載してはとのご提案がありました。当時どのお話しをしたかは可成りおぼろですので、新たにハエのあれこれを少しくご紹介することにしましょう。

## 双翅目昆虫とは

カブトムシやテントウムシは鞘翅目（しょうしもく）というグループを、チョウやガは鱗翅目（りんしもく）というグループを構成します。ハエはカ、ブユ、アブなどと共に双翅目（そうしもく）というグループを構成します。「目」というのは生物の分類階級の一つで、主な階級は上位から、界（かい）、門（もん）、綱（こう）、目（もく）、科（か）、属（ぞく）、種（しゅ）と呼ばれます。たとえば、テンサイモグリハナバエ（甜菜潜花蠅）という種階級のハエがいますが、このハエの所属する階級名は、動物界、節足動物門、昆虫綱、双翅目、ハナバエ科、モグリハナバエ属となります。ちなみにモグリハナバエ属にはほかにもギシギシモグリハナバエ、イタドリモグリハナバエなど多くの種が含まれております。

有翅昆虫（ゆうしこんちゅう）の成虫には基本的には前翅（ぜんし）と後翅（こうし）の2対（4枚）の翅（はね）があります。しかし、双翅目昆虫では、その名のとおり、1対（2枚）しか翅がありません。よく見ると、この翅の付け根の後に小さな棍棒状のものが認められます（図1、矢印）。これが後翅の変化したもので、平均棍（へいきんこん）と呼ばれ、飛行中の安定性を保つための平衡器官と考えられております。

双翅目昆虫は幼虫の形態も特異で、すべての種で無脚です（成虫には3対、6本の脚があります）。潜ることが幼虫の習性の基本なのでしょう。キノコバエやカなどの幼虫には立派な頭蓋（とうがい、

硬化したカプセル状の頭）がありますが、ショウジョウバエやイエバエなどでは頭蓋は完全に消失して（もちろん食べるための口と「歯」は残っている）、潜る能力が一段と高くなっております。

さて、カ、アブ、ハエなどと言え、一般にはあまり良い印象を持たれておりません。「山路来て何やらゆかしすみれ草」、そのスマイレの花に吸蜜に訪れるビロードツリアブ、まさに春の到来であります。ウェブでこのツリアブを検索すれば、体長10mm前後、長い口吻（こうぶん）を持ち、黄褐色の長毛に被われた、“もふもふ”感あふれる愛くるしい映像を見ることができるようでしょう。ハナアブの仲間も黄色やオレンジ色、黒の色模様がまるでスズメバチやマルハナバチを思わせる粋な装いで、病原体の媒介、農作物への加害などのため、たしかに人間に嫌われる双翅目昆虫は少なくありませんが、既知の全種数に比べれば、わずかな種類が害虫となっているに過ぎません。大部分は人の注意を引くことも無く、しかし自然の中での重要な役割を演じつつ暮らしております。

花粉の媒介によって昆虫類は地球の緑を守っておりますが、ハエ類の貢献も強調されてよいでしょう。花を愛でての野山の散策は心身のリフレッシュに最適です。ハナウドやエゾニュウなどの大型のセリ科植物の散形花序にたくさんの昆虫が群がっているのによく遭遇します。ハナカミキリやハナムグリ、種々のチョウなどのほかにも多種多

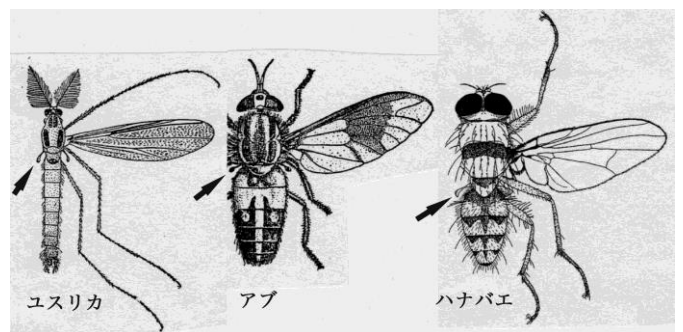


図1 双翅目昆虫（矢印：平均棍）

様な双翅目昆虫が見られ、マルハナバチやミツバチ以外にも多くの昆虫が花粉媒介に貢献していることが理解出来ます。また、ヤドリバエ（寄生蠅）と呼ばれるハエのグループは様々な昆虫類を寄主としており、農林害虫の重要な天敵となっています。益虫としての価値が極めて高いと言えます。双翅目昆虫はこの地球上にいらなくてもよい生物群では決してないのです。

### 多様な双翅目昆虫

双翅目昆虫は世界で 12 万種以上が報告されており、日本からは 7 千数百種が知られています。実際にはこの何倍もの種類が存在すると推測されます。これらは大きく 3 群に分けられます(図 1)。カの仲間(カ、ブユ、ユスリカ、キノコバエなど)、アブの仲間(アブ、ツリアブ、オドリバエなど)、ハエの仲間(ハナアブ、ショウジョウバエ、イエバエ、ハナバエなど)です。いわゆる「アブ」とか「ハエ」とかの呼称が必ずしも一つの群に対応してはおりません。キノコバエがカの仲間であったりしています。分類学以前の慣習でそう呼ばれてきてしまったので仕方ありません。

**カの仲間：**カ、ブユ、ヌカカ（糠蚊）などは吸血性（雌のみ）ですが、ガガンボ、キノコバエ、ユスリカ（揺蚊）など多くは吸血習性を持ちません。

**ガガンボ：**変わった呼称ですが、ほとんどのガガンボが通常の蚊よりも大きいことから「蚊ヶ母」（蚊の母）の意でこう呼ばれるようになったとのことです。ですから「カガンボ」と呼ぶべきだとの意見もあります。長い脚を持つこの昆虫の英語名は crane fly、まことに言い得て妙であります。ミカドガガンボは翅開長（左右に開いた翅の左端から右端までの距離）80mm 前後、脚長 70~80mm にもなる日本最大のガガンボですが、残念ながら北海道には分布していません。

**トワダオオカ：**カ科の昆虫ですが、成虫は雌雄とも花蜜を吸い、吸血はしません。幼虫は樹洞の溜まり水に発生し、他種のポーフラを捕食して育ち、自らも大きなポーフラとなります。幼虫時代に捕食生活を送るオオカでは栄養の蓄積が十分な

ため、成虫になっても吸血の必要がありません。青森県の十和田産の標本に基づいて発表された種ですが、沖縄本島以北、北海道にまで分布しています。沖縄本島産の個体群は別亜種とされています。体長が 13mm 前後もあり、多くの蚊が体長 5mm 前後であることと比較すれば著しく大型です。胸の周囲は黄金緑色の鱗片に、腹部の背面は青藍色の鱗片に覆われており、日本で最大かつ最美麗の蚊と言ってよいでしょう。

**アブの仲間：**ゴマフアブやアカウシアブなどのアブ科昆虫は吸血性（雌のみ）ですが、ミズアブ、ツリアブ、ムシヒキアブなど他のほとんどは非吸血性です。アカウシアブは体長 30mm 前後、これが身近に来ると、スズメバチにでも襲われたかと身構えてしまいます。「わらしべ長者」のお話は飛んできたアブを拾った藁にしぼりつけることから展開していきますが、縛る程の大きさがあるので、このアブはおそらくアカウシアブだったでしょう。

**ビロードツリアブ：**既述のように早春の訪花昆虫で、地表近くを花から花へと飛び移り、滞飛（たいひ、ホバリング）しながら長い口吻で吸蜜する姿はのどかそのものです。でも、その幼虫はとても平和主義者とは言えません。土中に営巣するハナバチ類の寄生者です。卵はハチの巣の入り口付近に産みつけられ、孵化した幼虫は、無脚ながら胸にある 3 対の剛毛で活発に動き、奥の巣室に到達します。そこでハチの幼虫の外部寄生者として成長を遂げて蛹化し、翌年また愛くるしい春の使者を演ずるのです。

**ハエの仲間：**ショウジョウバエ、ミバエ、イエバエ、ハナバエなどが蠅らしいハエですが、ハナアブもこの仲間です。カブトムシやチョウでは終齢幼虫が脱皮して蛹になります。カやアブの仲間の昆虫もそうです。ハエの仲間はそうではありません。蛹になる時期が近づくと終齢幼虫は静止して太短くなって、そのまま皮を脱がずに硬くなります。これを困蛹（いよう）と云い、真の蛹はこの中にできます。ハナアブも困蛹を形成します。カやアブの仲間では吸血するのは雌だけですが、イエバエ科のサシバエ類は雌雄ともに吸血し、家

畜に多大なストレスを与え、乳量減少など大きな被害をもたらしています。アフリカのツェツェバエ科のハエも雌雄ともに吸血性で、人獣共通感染症である眠り病の媒介者として恐れられています。

キイロショウジョウバエ：台所まわりに普通に見られる(?) 小さなハエで、“コバエ”として嫌われていますが、生物学や医学におけるモデル生物としての貢献には計り知れないものがあります。ショウジョウバエ類の多くは大きな赤い目(複眼)を持ち、熟した果実や樹液などアルコール発酵するものに誘因されることから、酒好きの空想動物「猩猩」になぞらえて名付けられたとのことです。ショウジョウバエ科のハエは日本からは300種以上が知られています。

カマバエ：鎌蠅。カマキリバエ(螻蛄蠅)と呼ばれることもあります。捕獲が生きる手だて。前脚がまるでカマキリのそれのようです(図2)。系統的に離れた生物が似たような習性のため似たような形質を持つようになることを収斂進化(しゅうれんしんか)と言いますが、その典型です。ユスリカ、カ、ヨコバイなど捕まえられるものならなんでも食べてしまいます。このハエの仲間は日本からは3種が報告されており、その内の1種は北海道にも分布しており、稀ではありません。

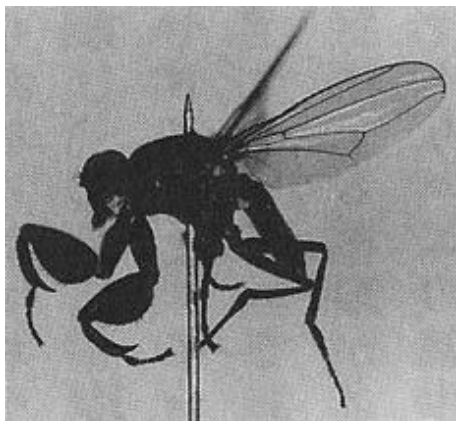


図2 カマバエ

テンサイモグリハナバエ：北海道では砂糖の原料作物としてアカザ科植物のビート(甜菜)が広く栽培されています。このビートの葉裏に産卵するハナバエ科のハエが本種です(図3)。孵化した幼虫は直ちに葉に潜り込み、内部の組織を食害します。被害葉にある水疱状の潜葉痕(せんよう



図3 テンサイモグリハナバエ

こん)の内部には数匹の幼虫が見られることでしょう。このハエはビートのほかにもアカザやホーレンソウなどのアカザ科植物を加害しています。幼虫時代に葉に潜る習性はハモグリバエ科など他の双翅目昆虫のほかにも、ホソガ科やチビガ科などの鱗翅目昆虫や、ハムシ科やタマムシ科などの鞘翅目昆虫など、多くの昆虫類に広く見られます。隠れた場所で摂食、生育することに生存上の有利性があるのでしょうか。でも、これを探し出して産卵する寄生蜂(きせいほう、やどりばち)などの天敵もたくさん知られており、生物世界に無敵はありません。

### 蠅の語源

ハエは漢字では蠅と表記しますが、これは「虫+黽」の会意文字ということです。「黽」は音読みで「ビン」または「ベン」でカエルの意をもち、腹の膨らんだカエルを描いた象形文字とのことです。ハエの太くて丸い体つきから、虫をあらわす「虫へん」にずんぐりしたイメージ記号の「黽」で「ハエ」というわけです(加納喜光 動物の漢字語源辞典)。「やれ打つな 蠅が手を摺り 足をこすり合わせる動作をします。これが繩をなっているように見るところから「蠅」の漢字が出来たとの説もあります。口器や脚の先端には「味覚毛」があって、歩きながら食べ物の評価を行っております。足すりで常に清掃を心がけているのでしよう。



## ハエの活用

ハエは嫌われ一辺倒かというところ、そうでもありません。農林害虫の天敵として有益なヤドリバエ類以外にも私どもの生活に有用なハエ類がおります。

ウジ療法: マゴットセラピー (maggot therapy)。ハエの幼虫である蛆が正常組織を損傷すること無く壊死組織を食べ、新しい組織の形成を促します。また、幼虫の唾液に含まれる物質が微生物を殺し、傷の回復を早めるということです。糖尿病による足の壊疽の治療や、床ずれなどによる重度の褥瘡の治療などに使われ、糖尿病患者の足の切断を高い確率で回避しているとのこと。戦場で負傷した兵士の傷に“蛆がわく”ことによって早く治ることが知られて、19世紀には欧米でこのマゴットセラピーが広く普及しました。糖尿病患者の増加や薬剤耐性菌の増加などによりこのウジ療法が再び注目されるようになりました。英国では保険医療が認められていて年間数百人がこの治療を受けているそうです。日本での治療例は徐々に増えてはいるものの、保険外医療であることが課題となっているということです。ウジが傷治療に有効であることは数千年の昔からオーストラリアやミャンマーなどで知られていました (wikipedia: マゴットセラピー)。日本神話ではイザナギは亡くなったイザナミを追って黄泉の国へ行きますが、そこで見たのは蛆にたかられ変わり果てた、愛する妻の姿でありました。吃驚仰天、ほうほうの体で逃げ帰るのですが、ひょっとすると日本でも昔々にマゴットセラピーが行われていたのかも知れません。

花粉媒介: 現代のウジ療法には無菌飼育されたヒロズキンバエの幼虫が使われていますが、このハエは農業現場でも脚光を浴びつつあります。最近受粉用ミツバチの不足が問題となっております。ハウス栽培で受粉用に導入されているセイヨウオオマルハナバチの野外への逸出による環境問題も深刻です。そこで、在来種であるヒロズキンバエの成虫が従来の花粉媒介者の代替者あるいは補完者として期待されているのです。ハエが媒介結実したマンゴーやイチゴをおいしく食べる意識改革も期待されます。

カース・マルツウ (casu marzu) : イタリアのサルディーニャ地方の、生きた蛆が入っているチーズ。製造工程でチーズバエ (*Piophilidae casei*) (図4)に産卵させ、その幼虫の消化酵素によってチーズの発酵、脂肪の分解を促進させると、とてもおいしくなるのだそうです。日本でも蜂の子 (クロスズメバチの幼虫) やカイコの蛹、イナゴなど様々な昆虫が、かつては普通に、今でもそれなりに食べられているので、生きた蛆入りチーズも彼の地の好きな人には何としても食べたいものなのでしょう。食文化とは不思議なものです。このハエは日本にもいますが、食品の発酵には使われていません。ベーコン、乾燥肉など高タンパク質の貯蔵食品に発生するので、その場合は害虫ということになります。

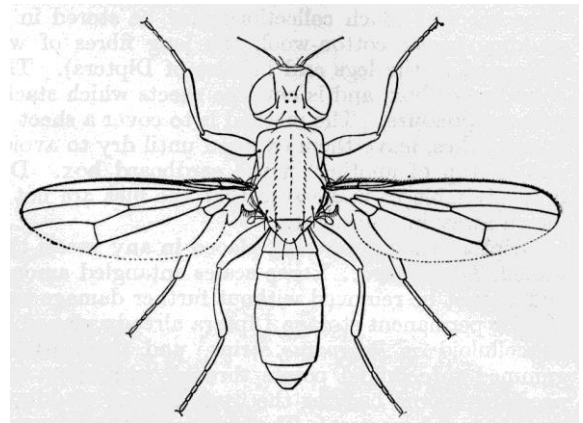


図4 チーズバエ

釣り餌: 釣り具屋へ行くとハエの幼虫が「サシ」と称して売られています。餌用に大量飼育されているので、不潔に思う必要はありません。クロバエ、キンバエ、トゲハネバエなどハエの種類によって幼虫の大きさもいろいろで、ワカサギ、チカ、イワナ、ヤマメなど対象魚の口のサイズに合わせて使い分けられています。食紅で赤く染めた「紅サシ」はワカサギやチカなどに偉力を発揮するようです。釣行予定が変わって使わずにおくと、変態して俵状の囲蛹になってしまいます。

ハエの暮らしぶりはまだまだ尽きないのですが、いずれまたお話ししましょう。



## 活動報告

## セントラルパークに誘(いざな)われて

植物ボランティア 加藤 康子

肌寒い3月末、心細い思いの私を慰めてくれたのはセントラルパークの華やかなこぶしの大木でした。2006年、ニューヨークのマンハッタンに住み始めたときの話です。愛犬の散歩に毎日セントラルパークに通ううち、サクラ、リンゴ、ナシ、マグノリア、ヤマボウシ、フジ、ライラック、キリ、アゼリア、ニセアカシア、トチノキ…次々に咲く木の花に魅せられていきました。夏には木陰の芝生に寝転んで虫と戯れ(マンハッタンには虫がいるのです)、秋には鮮やかな紅葉に心躍らせ、冬は人っ子ひとりいない寒々とした公園を木肌の模様を眺めながら歩き回りました。

春が巡り、また様々な木の花が咲き始めます。この木は英語でなんていうのだろうか？ こぶしは *kobushi magnolia*、濃いピンクの八重桜には“Kwanzan”のネームプレート。関山(カンザン)という桜の名前はセントラルパークで知りました。ハナミズキは *dogwood*、ヤマボウシは *Japanese dogwood*。首都圏で暮らしていた私はセントラルパークで初めてヤマボウシを見ました。チューリップのような花を咲かせる *tulip tree* があると聞いて探しあてました。和名はユリノキ。それぞれの木のことを本やインターネットで調べたりするうちに、すっかり木の虜になりました。

東西800m南北4km、北大キャンパスの2倍弱の広大なセントラルパーク。花や紅葉の美しい時季には楽しくて半日歩き回ることもありました。

ニューヨークに4年間暮らし東京の郊外に戻ってきましたが、マンハッタンでの木に親しむ生活が忘れられず、5年半前に公園が多く自然豊かな札幌に移住してきました。

何か植物にかかわることをしたいと思っていたところ、北大博物館での植物ボランティアの活動を知り応募しました。

最初に私に与えられた仕事は千島列島の植物標本のデータベースづくり。標本のラベルを見ながら、植物の種ごとに、採取した場所、年月、採取

者を英語、ローマ字で打ち込みます。多くの標本は戦前の日本統治時代のもので、100年前の標本の花の色が残っているだけで感動してしまいます。古い標本では地名を漢字で書いていることもあります。幌筈島(パラムシル島:Paramushir Isl.)、択捉島(エトロフ島:Iturup Isl.)、得撫島(ウルップ島:Urup Isl.)、薬取(Shibetoro)、単冠(Hitokappu)、古釜布(Furukamappu)、爺爺岳(Mt. Chacha)など、千島列島の地名にもずいぶん詳しくなりました。合弁花の全データ7200余りを入れ終わったところで一段落。

周りを見回すと他の植物ボランティアの皆さんは標本貼付、配架などさまざまな標本整理の仕事をされています。標本庫には膨大な数の未整理標本があり、より優先順位の高い仕事の手伝いをさせていただくことにしました。

そのひとつが標本ラベルの作成です。採取者に代わってラベルを作るのですから責任重大です。時には古い植物標本のラベルを作ることもあり、遠い昔の植物学者に思いを馳せます。

標本整理の仕事を通して、最近は学名や分類学にも興味を持つようになりました。植物愛にあふれる先生方、ボランティアの皆さんから様々なことを教えていただきながら、貴重な植物標本の整理の一端を担えることに喜びを感じています。

ふりかえてみて、セントラルパークでの経験が、私を博物館での植物ボランティアに導いてくれたと、しみじみ感じています。



セントラルパークの関山の下でくつろぐ愛犬ココ

## ナガカメムシというへんなカメムシについて、講演をしました

昆虫ボランティア 伴 光哲

私は幼い頃から昆虫が好きで、大学の昆虫学研究室を修了後は環境調査の業界で勤務しています。札幌へは2015年の4月に異動し、現在は日常業務の傍ら、北大総合博物館でボランティアとして活動させてもらいながら研究活動を続けています。

私が調べている虫は、「ナガカメムシ」というカメムシ（口がストローみたいになっている、六角形の臭い虫を思い浮かべる方も多いかも知れませんが）の仲間で、日本から170種近くが、世界からはおよそ4000種が知られています。主に種子などの植物体を餌としている種が多く、空き地や河川敷などの草地に棲息していますが、大きさが1cm以下のものが大半であることや、地味な色合いのものが多いことから、一般的な認知度は余り高いとは言えません。しかしながら、あるものは農作物を食い荒らす農業害虫として、またあるものは反対に農業害虫を食べる「生物農薬」として注目されていたりと、実は私たちの生活と深く関わっています。また、私の日常業務である環境調査においてもしばしば採集され、採れたナガカメムシを調べることを通し、調査地の自然環境が今どんな状態なのかを知ることができるといった面もあります。



ジュウジナガカメムシ(体長10mm程度)の集団  
本種は体に毒を取り込んでおり、赤と黒の模様は警戒色とされる



長い触角と太くて刺だらけの脚が特徴的な  
クロスジヒゲナガカメムシ(体長7.5mm程度)

そんなナガカメムシですが、未だ名前のついていない種の存在など、よく分かっていないことが多い虫でもあります。この北海道でも、分布することが今まで知られていなかった種が見つかるなど、私が赴任してからの数年の間に限ってもいくつかの新知見を得ることが出来ました。

今回、2016年10月に昆虫サロンで、12月に平成遠友夜学校でナガカメムシについて、それぞれ講演する機会を頂きました。特に夜学校のような昆虫関係でない方々の前で、昆虫や自分の研究の話をするには自分自身経験がなく、聞いて頂いた皆さんに分かってもらえるか、反響があるかは不安でしたが、それでも何とかいくつか質問を頂くことができ、少しはナガカメムシの存在を知ってもらうことができたのだろうかと考えています。

北大博物館には、膨大な量の昆虫標本が収蔵されており、教員や学生はもちろんのこと、ボランティアや外部の研究者によっても個々の研究に収蔵標本が活用されています。私もそんな一人として、これからも研究に博物館の標本をどんどん活用できるよう、頑張っていきたいと思っています。

## お話の出来る犬 ～古新聞の整理から～

図書ボランティア 久末 進一

植物標本の押し葉作りのための古新聞には、時々、奇妙な話題を発見することがある。

「お話の出来る犬」の記事が掲載されていたのは、明治44（1911）年4月20日付『國民新聞』である。概略次の通り。

ガルデレーゲン（独）の森林看守人エーベルトが飼っている牡犬ドンが、巧みに口をきくと評判になっている。鼻をうごめかせたこの犬が、通りすがりの百姓女に、突然、「腹へった」と叫び、女はびっくりして手に掲げたバター壺を落としてしまった。どうやらバターの香りに喜んだらしい。飼い主は「それがどうした」と気にもとめず、犬語を聞かれて、「ドン」（自分の名前）と「ハーベンランド」（最初に口をきく犬に気づいた人の名前）、それに「お菓子」や「おやすみ」も言うとのこと。これが新聞報道されるや大騒ぎになり、たちまちヨーロッパ各地から学者や見物人が殺到した。動物学会会長、フオッセル博士（独）が調査に当たり、犬が人の言葉を真似得るのは、すべて発音の具合で、この犬の母音は比較的良く発音されていると表明した。

ペットと暮らした人なら誰しも、愛犬や愛猫と会話できたらどんなに楽しく幸せだろうと夢見たことがあるはず。だが、言葉を交わさずとも何となくコミュニケーションが成立しているのが不思議である。

ドンの犬語はドイツ語らしいが、日本語で「ゴハン」をしつけたのは、図書ボランティア仲間のHさん。愛犬プリンに食事のつど、繰り返して「ゴハン」と教え続けたところ、やがて「ゴワン」と発音できるようになった。そして遂に食事時間になるや犬小屋から出てきて「御飯！」と催促するようになったという。

牛番の牧場犬が「モーモー」と、牛の真似で吠える例はよく聞く。筆者の隣家の犬ルンは、消防署が時報とともに流す屋外放送の曲「ドングリコロコロ」に合わせ、犬小屋の屋根の上で「アーン、アーン」と小節を効かせて歌っていたものだ。あちこちから遠吠えの合唱が返ってきて、このカラオケ犬のお蔭で、昔から犬が歌うのはあたり前と思っていた。

ところが犬だけでなく猫にも猫語があった。

まだ、コード付き黒電話の頃の実話だが、大学進学で故郷のわが家を離れて来た女子学生がホームシックになって実家に電話すると母親が困っていた。

「猫がふさぎこんで死にかけている」とのこと、急に彼女がいなくなったのが理解できないでいるらしい。驚いて猫を受話器まで抱いてきてもらい、必死に電話で説得すると、猫も電話で返事をする。

「ごめんね、ミューコ、捨てたわけじゃないの」「ミャア」「夏休みに帰るからね、元気だよ」「ミャア、ミャア」

以来、電話の鳴るたび猫は飛んで来て、彼女の声に応えて猫語でお話する。彼女も電話を耳に、ペットの気持ちがわかって涙をながす。現代ならスマホかスカイプと云ったところか。

昔も今も人の暮らしに寄り添って生きている犬や猫も、人並みに喜怒哀楽の感情が豊かになってきているようだ。

無理に言葉として話し合えなくても、魂で通じ合う情愛という言葉がある。その証拠に今は亡きペットのあの愛らしい顔や姿が、夢に現れて「ありがとう、さようなら」と挨拶したり、「泣かないで、今も一緒よ」と励ましたり、「遊ぼう、遊ぼう」とすり寄ったり、いつものあのあどけないしぐさで話しかけてくるではないか。



## 北海道大学附属図書館旧蔵図書に見る札幌農学校学生の学習実態

前酪農学園大学教職センター 山田 大隆

北海道大学の前身である札幌農学校(1876-1907)については、平成遠友夜学校(校長藤田正一獣医学部名誉教授、15年間継続)ほかの活動により、その日本高等教育史上での価値が解明されつつあるが、WSクラークが本来目指した総合大学性、2期生廣井勇が重視した北海道開拓上で荷うべき農工大学性については、札幌農学校の教育課程や学生の受講講義ノートなどの部分的な研究はあるものの、その教育実態の全貌がこれまで不明であった。筆者は札幌農学校における欧米科学技術教育の受容に関する科学史研究の一環で教育内容の実証として、かつて(1982年)北大附属図書館北方資料室(秋月俊幸主任)で整理された3,000冊もの札幌農学校旧蔵舶載図書すべての調査とその統計的研究(書名と筆者経歴、導入冊数と年次変化、蔵書印とその変遷、サインや汚れの使用痕跡、蔵書リストと現物との照合、出版年と導入傾向の変遷、実験器具との対応ほか)を数年間行ない、札幌農学校の教育内容の全貌を明らかにした。

この旧蔵図書(洋書)は、開校時に大方が準備され、クラークの理想とした総合性の大学建設を反映して35分野で総計6,160冊(教科書割合68.8%)もの蔵書数があり、調査では3,000冊の残存が判明した。旧蔵図書6,160冊のうち約69%を占める教科書の図書構成は、農学(249冊)、化学(399冊)、事典類(262冊)、工学・測量(199冊)、地理学(305冊)、歴史(627冊)、語学(1050冊)、数学(501冊)、物理学(276冊)、動物学(218冊)等であり、クラークほか米国人お雇い教師によるこの学校の建学精神の反映として、導入図書選定



札幌農学校旧蔵舶載洋書群  
(北大附属図書館北方資料室書庫)

には日本近代化での教養基礎を養成する、語学、歴史、地理、数学、物理が重視されている特徴があった。

2期生廣井勇を中心とした1887(明治20)年の工学科創立に伴ない、世界水準の工学書が広範囲に導入(米語独語を中心に総計585冊)されている。

調査した蔵書の使用痕跡の特徴では、当時貴重なこれら世界的に著名の各種図書を、貸与教科書として多数の歴代学生が読み、教師クラークの真似をして、使用者の読了サインと年月日が豊富に図書に残され、歴代卒業生名簿(明治13年から昭和39年まで)から使用者人物(内村鑑三、内田清、内田富吉、廣井勇ほか)が特定出来ること、著名教師(クラーク、ストックブリッジ、ランドルフ、廣井勇ほか)、の寄贈蔵書がサイン入りで見られること、熱気に満ちた学生の脂汗や挿絵への落書きや書き込み多数が見られること(特にこの農学校の農工大学的特色が反映されている物理学教科書で高い使用度であった仏語原著英訳版大ガノ一物理学書各版には使用痕跡が多く残されている)、これらは、生々しい当時の学習実態が再現出来る臨場感あるものであった。

[筆者は北海道大学理学部1969(昭和44)年卒]

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 48

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2018年3月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>